

| | | | |
|---|--------------------------------|----------------------------------|---------|
|  | <h1>進取の気概</h1> <p>(校長室だより)</p> | <p>有田市立箕島中学校</p> <p>自主 友愛 剛健</p> | R3・11・4 |
| | | | No.41① |

10月19日(火)～21日(木)の3日間、3年生は修学旅行に行ってきました。行き先は新型コロナウイルスの影響もあり、和歌山県紀南地方でした。天候の関係で、1日目と2日目の一部を入れ替えて実施ということもありましたが、大きな事故もなく、無事に終わることができました。修学旅行の終わりに、3年生のみなさんには「よい加減」の話をしました。ちょうどいい塩梅、料理でも塩を入れすぎると辛くて食べられません、薄すぎても食べられません。ちょうどよい加減だから美味しく食べられる。3年生のみなさんは楽しむところは楽しむ、きちんとするときはきちんとする、ちょうど「よい加減」にできた素晴らしい修学旅行であったと思います。修学旅行の本来の目的は、見聞を広げること、集団生活のきまりを守れるようになること、社会に生きる一人として守るべき規範(ルール)を身に付けることです。その目的も十分に達成できたのではないのでしょうか。



あいこいん
な話
が
た

ホテルの部屋の備え付けのメモ帳に3日間お世話になった感謝の気持ちを残していたみなさんもいたようです。ホテルで働いている人にとっては仕事だからとしても、そういうことに感謝できる感性とか感謝の気持ちを表す心配りができるって、とても素敵なことだと思います。温かい気持ちになります。



修学旅行のお土産話

修学旅行の行程の中に、「日本とトルコの友好の歴史樫野崎ガイドツアー」がありました。トルコは日本に対して好意的な国として世界的に有名です。なぜ、好意的なのか、そのきっかけとなったのは和歌山県で起こったある出来事です。3年生は現地で学んできたのですが、1・2年生のみなさんにもぜひ知ってほしいので紹介します。



イラン・イラク戦争が続いていた1985年3月17日、イラクのサダム・フセイン大統領が「今から48時間後に、イランの上空を飛ぶ飛行機を無差別に攻撃する」という声明を発表しました。イランに住んでいた日本人は、慌てて首都テヘランの空港に向かい出国を試みましたが、どの飛行機も満席で搭乗することができませんでした。世界各国は自国民を救出するために救援機を出しましたが、日本からの救援機の派遣は、航行の安全が確保できないとの理由から見送られ、空港にいた日本人は途方に暮れていました。

そんな時、救いの手を差し伸べてくれたのがトルコ共和国です。トルコから駆けつけた救援機2機により、日本人215名全員がイランを脱出することに成功しました。タイムリミットのわずか1時間前のことでした。当時、テヘランには多くのトルコ人も在住していましたが、航空機を日本人に提供し、トルコ人は陸路で避難をしたそうです。

なぜトルコの航空機が来てくれたのか、日本政府もマスコミもわからずにいましたが、後に駐日トルコ大使のネジアティ・ウトカン氏は当時、次のように語られました。「エルトゥールル号の事故に際して、日本人がなして下さった献身的な救助活動を、今もトルコの人たちは忘れていません。私も小学生の頃、歴史の教科書で学びました。トルコでは子どもたちでさえ、エルトゥールル号の事を知っています。今の日本人が知らないだけです。それで、テヘランで困っている日本人を助けようと、トルコ航空機が飛んだのです。」 (串本町ホームページから)

【エルトゥールル号の日本訪問と遭難】

1890年(明治23年)9月16日の夜、トルコ(当時はオスマン帝国)の軍艦「エルトゥールル号」が串本町樫野崎沖で台風による強風と高波により遭難し沈没しました。587名の命が奪われる大惨事となりましたが、大島の人たちの懸命の救助活動により69名が救出されました。また、生存者の救助だけでなく、その看護、亡くなられた方の捜索・引き上げにも不眠不休でありました。当時の大島は離島で通信手段や救助機関も十分ではなかったはずですが、また、食料もごくわずかの蓄えしかなく救助は大変困難であったはずですが、そのような中で、大島の人たちが行った献身的な救助活動が、時を超えて、イラン・イラク戦争での多くの日本人救出につながったということです。



トルコの軍艦「エルトゥールル号」が串本町沖で遭難した事故から131年となる16日、同町樫野の慰霊碑前で追悼式典が行われ、町民らが献花し、犠牲者の冥福を祈った。

工号は1890年、明治天皇を表敬し、横浜港からの帰途、嵐に遭遇し沈没。乗組員587人が犠牲になったが、地元住民の献身的な看護で69人が一命を取り留め、その後の日本とトルコ

の友好の原点となった。例年、トルコ側からも関係者が参列するが慣例だった。コナハの今年は田嶋勝正町長や樫野区長の高山カヤキさん(74)ら5人だけが参加態様に続き、順番にコリの花束を慰霊碑に手向けた。高山さんは遠い異国で亡くなった方々は無念だったと思うが、ずっと追悼を続けてきたことが両国の友好にもつながっていると思うと話した。

工号犠牲者へ祈り
 事故131年 串本で追悼式典
 読売新聞
 9月28日